

民主主義の象徴 陰には民族浄化

海外留学した長崎大多文化社会学部の学生に、現地を感じ、学んだことを報告してもらおうと、4月から始まった「環球通信」。第2回は米国のサウスダコタ州から。書物やテレビで目にしたことがある、あの石像についてのレポートです。



米国の発展に寄与したとされる大統領たちの顔が、民主主義の象徴として石像になっている、あの場所だ。米国全50州の州旗が掲げられた道を通り抜けて目の当たりにすると、感嘆の声が自然と漏れる。
しかし、大統領たちには裏の顔がある。ラッシュモア山はかつ

昨年8月から留学している米国中西部のサウスダコタ州は、ネイティブ・アメリカンが多く居住していた土地として知られる。「ダコタ」は種族の一つ、米国では居留地が各地に残り、生活を営む人たちがいる。
そんなサウスダコタの一大観光地といえば、ラッシュモア山。



先住民の文化「忘れたくない」

@米ノーザン州立大

て、米政府がネイティブ・アメリカンを追い払い、占領した土地なのだ。この国が発展し、民主主義を確立した背景には、「民族浄化」の歴史がある。その事実が、ここに表れている。
近くの博物館には、ネイティブ・アメリカンを紹介するコーナーもあった。特に印象に残ったのは、彼らが暮らしていた家の展示。テントに似た円錐形で、中心に立つ一本の木が布を支える構造だ。

私は、彼らの文化にひかれて



ホストファミリーとラッシュモア山を訪れた筆者(前列右から2番目) 昨年4月



寮で友人と食事する筆者(左端)=1月

いた。均一化の傾向が見られるこの時代に、彼らのような唯一無二の文化は珍しく映ったのかもしれない。言葉、生活、価値観……。すべてが新鮮で、魅力的だった。

ネイティブ・アメリカンが身につける、羽根がモチーフのイヤリングを買った。彼らを「忘れたくない」という気持ちが自分の中にあつたからだろう。イヤリングを耳につけると、彼らの仲間になれたような気がした。
(4年・斎藤直)